Webtoon元年に

具本媛

2020年代に入って、Webtoonに関する取材や制作依頼が増えるようになってきた。2009−2010年度、私がまだ大学院生だった頃、私を含め韓国人留学生の内複数人がWebtoonを（当時はスクロールマンガと呼んでいた）課題の一部、又は修了制作として出したことがあるから、まさに10年後の追い上げだと言えるだろう。

私が日本にマンガ留学した2005年は、単行本の売り上げが雑誌の売り上げを上回った年であり、当時のマンガ出版業界には緊張感が漂っていたのを覚えている。それは先生方も例外ではなく、少なくともマンガを専攻している君たちは、ちゃんとマンガを読まないと！ というのをまるで口癖のように、耳にタコなぐらい訴えておられた。なぜ単行本ではなく雑誌なのか、限られた作品をピンポイントで購入するのではなく、新しいマンガに出会える機会を設けるのがなぜ大事なのか、など理由は様々だった。しかし、学生だった当時の私は、時代の流れには逆らえない、と思っていた。

今、教員の立場になった私は学生に同じことを訴えている。現在の学生たちの多くが、自分の作品をどこに持ち込めばいいのか分かっていない。現状、デビューのためには雑誌に持ち込むか雑誌の新人賞に出すことになっているから、結局は雑誌を読んでおかないと、自分の作品がどこに適しているのか分からないのだ。しかし、今は、雑誌を読みなさいに、紙の本も読みなさい、を追加している。短ページを読み慣れている学生たちは見開きでの演出のやり方を考えるのが難しいのだ。更には、Webtoonを読み慣れている留学生の中では全てのページを横にしか割らない傾向も見えている。ならWebtoonを描けばいいのに、やはり日本で見開きマンガを描きたいというから謎だ。

しかし、日本の見開きマンガにこだわる学生を見ているとサポートしたい気持ちと共に、心配も込み上げてくる。現在、Webtoonの勢いは凄まじい。数字では分かっていたけど、電車などでWebtoonを読んでいる人を見かける確率も高くなっていて、それこそ肌で感じるようになってきた。つまり、これから卒業していく学生たちが見開きで活躍できる場は今後今の規模を維持するか、最悪今の規模が維持できなくなっていく可能性の方もむしろ高い。 また、Webtoonの勢いは日本だけではなく、世界各国に同時進行で広がっている。単刀直入にいうと、海外市場の開拓において、翻訳版をサーバーに上げさえすれば成り立つWebtoonと、印刷と在庫、流通、読み方においてもリスクを抱えることになる日本の見開きマンガでは、事業者側が追うリスクが違いすぎる。もしチャンスがあるとしたら電子書籍の方だろう。本にこだわる必要などどこにもない。

Webtoonは見開きマンガのように表現が豊かではないと一方的に主張する人もいるが、マンガが日本市場に広がりつつあった時、マンガは小説のように想像力を掻き立てないのよ、と言われていたことを思い出してほしい。Webtoonがまだ表現において成熟してないのは確かにあるかもしれないが、関わる人が増えるにつれ、目まぐるしい表現の進化を遂げているし、無視できない可能性を秘めていると思っている。PCからスマホ、スマホのサイズの変化、解像度の変化、ネットの速度に合わせた変化などに対応してきた表現であるため、成熟するよりは合わせていくことを最優先にしてきたことが少々ネックになっているし、今後もどのように動くのかが読めないのは確かだが、だからこそ研究のしがいがあるようにも感じている。更に、表現の成熟が本当にマンガ業界が目指すべきところなのか？においてもはっきりそうだと答えていいものだろうか。私の教える学生たちが卒業した時に、必ずしもWebtoonがメジャーになっているとも断言できない。見開きマンガのような、100年の成熟期間が与えられるとは到底思えない。となると、私の学生たちに、また私たちに求められるのは、素早い媒体への対応能力ではないだろうか？ 日本において（そしてこれはマンガに限ったことではない）決定的に足りないのはこの素早さではないだろうか？

繰り返しになるが、2020年代に入って、Webtoonに関する取材や制作依頼が増えるようになってきた。その時ほぼ必ず聞かれる質問が、なぜWebtoonは日本でこんなにすんなり受け入れられたと思いますか？ という質問だ。

すんなりではない。遅いし、未だに受け入れられたと断言することも難しい。むしろその質問の中にこそこの広がりに対する警戒心が含まれている。つまり受け入れていないのだ。

しかし、かつてのマンガもそうだった。なぜ日本はマンガがこんなに人気なのか、なぜ日本ではこんなにすんなりマンガが出版界の王者になれたのか、とだれかに聞かれたら、そこもやはりすんなりではなかったと言えるだろう。マンガは悪書として扱われたし、書店はマンガの受け入れを拒んだ。そしてそれはそんなに昔のことでもない。

すんなりでなくとも、日本のマンガの広がりからWebtoonの広がりを占うことができると、私は思っている。既存の業界や社会が拒んでも、市場が広がれば認めざるをえなくなる。Webtoonを警戒しても時代が、読者が求めれば、流れは変わるし、既に変わりつつある。

単に、よりによって似たような道を辿っていたマンガ業界の中に、自分たちに向けられたのと同じような警戒心をWebtoonに向け、卑下しているのが苦い。マンガ業界だからこそ、どんなに無視され軽視されても、表現そのものには無限な可能性があると、そして市場こそがその価値を証明してくれると、分かっているはずだ。

少なくとも業界も学会ももっと読んでから語ってほしいものだ。

《Webtoonが浅いと思うあなたにこそ読んでもらいたいおすすめのWebtoon3つ》

- ユン・テホ「苔〜黒く濁る村〜」(Toomics) *PCで読むことを勧めたい
- Hun X Jimmy「ナビレラ」(ピッコマ)
- チョ・ヒョナ「緑の手紙」(Lineマンガ)